

北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」 第82回定期演奏会

本井 理

総評

北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」（以下「アウロラ」と称する）は北海道でもっとも早く創立されたマンドリン・ギター合奏団で、故・鈴木静一氏がアウロラのために書いた作品を初演した歴史もあって全国の関係者に名前が知られている。

こうした経緯もあって、例外の年もあったが定期演奏会の最終ステージでは長らく鈴木静一の大曲が取り上げられ、中央大学、立命館大学、九州大学と並んで鈴木作品の牙城となっていた。しかし、1996年に『悲愴序曲「受難のミサ」』が取り上げられた（メインではなかった）後は、2004年に『スペイン第2組曲』が演奏されたのみで、伝統は途切れた。

これに対して古いOB連から「鈴木をやらないのはけしからん」という圧力があるとも聞かれるが、筆者は団体の発展のためには鈴木作品を断ち切ってよかったと信じている。

「鈴木静一の大曲」というのは、1966年以降に作曲もしくは改作された後期作品のことであるが、筆者は以下の理由により音楽（芸術）としては評価できない。

第一は、マンドリン・ギター合奏で演奏しなければならない音楽的な必然性がないからである。筆者は鈴木作品が嫌いではないのだが、後期作品を聴いていると「マンドリンが入っていなければ本当によい曲なのに…」と叫びたい思いにかられる。つまり、吹奏楽か管弦楽で演奏した方がよいということだが、そのような曲であるならばマンドリン・ギター合奏で演奏する価値がないといえよう。

第二は、マンドリン・ギター関係者が音楽に無知なる故に、後期鈴木作品を演奏することが合奏発展の阻害要因になりかねないことである。たとえば必ず登場する「嵐」もしくは「戦闘シーン」は、スネアドラムが1台入っているだけで十分な音楽表現がなされており、マンドリンの速弾きパッセージは楽曲の重要な構成要素ではない。それをマンドリン奏者はメトロノームに合わせて必死に練習し、楽譜どおりには違いないが教則本的・機械的・無表情、かつ練習の成果を発揮すべく大音量で弾き、チャラチャラと安っぽい音楽に変えてしまうのである。賛助の管楽器と音量で競おうとする行為も無謀だという以外に言葉がない。

話は戻るが、1997年以降「ポスト鈴木時代」に入ったアウロラは「鈴木時代」には考えられなかった洗練された演奏もあるにはあったものの、年によって出来不出来が極端で、演奏内容や芸術性の面ではここ数年で「小樽商科大学プレクトラム・アンサンブル」に大きく水をあけられてしまった。橘直貴氏を客演指揮に迎える、あるいは二橋潤一氏に作品を委嘱するなどといった馬鹿げた行為に時間と労力（と金！）を浪費したのが最大の原因であるが、それを勧めたOB連こそ、鈴木作品の復活を期待するOB連以上に罪が重い。

もともとアウロラは「定演よりも『初夏の演奏会（春の演奏会）』の方が面白い」といわれていた。つまり、現役部員が自由奔放に企画を立てた演奏会は間違いなく光っていたのである。感性と知能は必ずしも比例するとはいえないが、やはり、北海道大学の学生さんはそれなりに優秀であり、その彼らが瑞々しい感性と若いエネルギーを注ぎ込んだ演奏会が悪い結果で終わる筈がない。

小樽商大を追い越すには、未だ越えなくてはならない決定的な壁があるが、筆者は今回の第82回定期演奏会は、大成功であったと思う。

演奏面でよかったのは、第一に、総勢79名（指揮者を含むので奏者は78名：管楽器・打楽器の賛助出演を除く）という大編成であるにもかかわらず、擦過音や複共鳴といった耳障りな「雑音」を気にならないレベルに抑えていたことである（理由は以前に発表した「藤女子大学マンドリンクラブ『フロイライン』」や小樽商大の定期演奏会に対する時評を参照されたい）。

アウロラの場合、パートによって時々「若いエネルギーが理性に打ち勝ってしまう」（特に卑猥な意味はない）場合があり、音質としては「フジフロイライン」の方が心地よいが、低音パートの充実（ギター26名・ベース5名：人数バランスも理想に近い）や日本有数である会場の優れた音響性能も味方となった。

よかった点の第二は、全体として「重厚で安定した音色」と「軽快で華やかな音色」の2種類を出し、曲目によって両者を使い分けていたことである。前者についてはマンドリンのパート譜が難し過ぎて弾けなかったため結果的にそうなったという疑念もない訳ではないが、これは小樽商大ばかりか、全国どこのマンドリン・ギター合奏団でも聴けない至芸だといえよう。

一方、悪かった点は、依然として曲目により出来不出来のばらつきが激しいことである。詳しくは後述するが、要するにリズムなど音楽に対する基本的な理解を欠いてテクニックが先行しているため「よい演奏結果を出した曲目は、実は（録音の）精巧なコピー演奏であった」というのが筆者の分析である。

「小樽商大を追い越すには、未だ越えなくてはならない決定的な壁がある」と書いたのは、まさにこのためであり、このような楽曲構築は砂浜に地盤強化の基礎工事をしないで超高層ホテルを建てようとするのに等しく、たまたま何曲かは好演奏ができて、他の曲、あるいは次の代になると、元の木阿弥となるリスクが高いのである。

しかし、たとえコピーであるにせよ、これほどの演奏ができるテクニックがあるということは、きちんとした手順を踏んだ楽曲構築さえ行われれば国内最高、否、世界トップのマンドリン・ギター合奏団として君臨するのも夢ではないということの意味している。

当地では昔からいわれてきたことだが北大と小樽商大は様々な分野でライバルであり、今後も良きライバルとして演奏成果を競い合ってほしいと思う。聞くところではアウロラの2006年の新指揮者は高校時代、吹奏楽の打楽器奏者だったとのことで、小樽商大との「対決」は本当に今から楽しみである。

そのためにもOBの方々には、妙なアドヴァイスや自分たちが参加している合奏団への勧誘など、部活動への介入は厳に謹んでいただきたい。彼らなら、きっと最高の演奏を聴かせてくれるはずである。

なお、本演奏会は集客や運営も上手であり、プログラムの曲目解説もよく調べて書かれていたことなども特筆すべきであろう。

ロシア序曲（ニコライ・ブダーシキン／帰山栄治編曲）

明るく調子のよい作品で、オープニングにふさわしい選曲である。緊張感からミスを犯しやすい1曲目であるにもかかわらず、すばらしい演奏であった。強いて難をあげれば、もう少しマンドリンがやんちゃに暴れ、マンドラ・テノーレはじっくり泣かせてもよかったのではないかと思う。堂々と落ち着いた演奏は風格さえ感じさせたが、テンポの速い民族音楽に特有のワクワクするような高揚感に欠けていたと評するのは、高望みであろうか。

前奏曲「黄昏」（ディーノ・ベルッティ）

『ロシア序曲』とは一転し、マンドリンの明るい音色を浮き立たせた演奏であった。知らせずに録音を聴かせたら誰もが別の団体の演奏と思うに違いない。こんな芸当ができるマンドリン・ギター合奏団は他に例をみない。もちろん、演奏の方もメロディーを美しく唄い上げており、心地よかった（以下『ロシア序曲』のような音色の演奏をAタイプ、『前奏曲「黄昏」』のような音色の演奏をBタイプとして付記しておく）。

弦楽のための三楽章「トリプティーク」（芥川也寸志／石川透編曲、Aタイプ）

「悪い」とはいえないが、後で考えてみると何となく違和感があった。第1楽章（アレグロ）と第3楽章（プレスト）はテンポが速過ぎて地に足がついていない感じがしたし、

第2楽章（アンダンテ）のフレージングも今一つだった。この時点で筆者は「コピー演奏ではないか」という疑念を抱いたのだが、詳細は『マンドリンオーケストラのための組曲』の項で論評したい。なお、第2楽章だけ「Bタイプ」の音色で弾けば、面白かっただろう。

歌劇『ウィリアム・テル』序曲（ジョアッキーノ・アントーニオ・ロッシーニ／丸本大悟編曲、Aタイプ）

この演奏は文句なく100点満点、いや、それ以上であろう。マンドリン・ギター合奏で演奏すること自体が厳しい楽曲であるのにもかかわらず、管弦楽に勝るとも劣らぬ芸術性あふれる演奏を成し遂げた偉業に心から拍手を贈りたい。「クボタ・フィロ・マンドリーネン・オーケスター」のクラシック音楽の編曲物などはアウロラの演奏の足下にも及ばない。これはマンドリン属の長所と短所を熟知していなければできない演奏である。したがって単なるコピー演奏と切って捨てる訳にはいかないのである。

マ・メール・ロワ（モリス・ラヴェル／笹崎譲編曲、Bタイプ）

非常に難易度の高い作品であるが、ほぼ非の打ち所がない演奏であった。同じ編曲物であるが歌劇『ウィリアムテル』序曲とは音色をチェンジし、フランス印象派にふさわしい美しく色彩感あふれる演奏を聴かせてくれた。ただし、演出に難があった。ナレーションを入れたのだが、事前にプログラムやアナウンスによる案内がなかったため唐突の感が否めず、ナレーターも不慣れな感じがしたし、館内放送の系統で音声を流したのは、いかにもまずかったと思う。演劇部か放送研究会に「プロ」の派遣を要請し、舞台袖にでも専用のマイクを設置して音響に配慮した上で読ませれば、より演奏が引き立ったのではないかと惜まれる。

マンドリンオーケストラのための組曲（二橋潤一、Bタイプ）

最悪の演奏で、論評の対象外である。実は作品自体も音楽的に大した価値はなく、プロの作曲家にとっては「定石どおり」の習作に属する類の楽曲である。なぜかといえば、第1楽章（プレリュード）と第3楽章（アリア）以外の各楽章は、フォルラーナ、ブーレ、メヌエット、ジークとリズムの取り方が明確に定まっている楽式だからだ。しかし、以上4つの楽章の演奏を聴けばリズムの取り方、あるいは楽式が舞曲に由来するリズムに規定されているという音楽の常識（基礎）が完全に欠如していることがはっきりと認識できる。もし、この手の作品を演奏したければ、春の段階で部内の練習曲として取り上げればよかったのである（最初にドイツ・ツップオーケストラの作品でリズムを学び、次いでイタリアの古典的なマンドリン・オリジナル曲でフレージングなどメロディーの唄い方を学べば楽しく実力が付けられるであろう）。この作品の選曲に当たって「定演で現代邦人物が1曲

もないから二橋作品でもやってみよう」といった安易な姿勢はなかったか。作品や作曲家を音楽的に正当に評価する能力も培わなければ、大恥をかくことになるだろう。

演奏会用組曲「広い村」(M. マトベーエフ/久保田孝編曲、Aタイプ)

今回の演奏会は『マンドリンオーケストラのための組曲』を除くと(別に二橋潤一氏に恨みがある訳ではないが同氏を担ぎ回っている馬鹿者どもに腹を立てているだけである)一般の聴衆が親しみやすい作品ばかりである半面、演奏の難易度が高く、それを連続して演奏したのは「凄い」としかいいようがない(並べ方も自然)。大学のマンドリン・ギター合奏団のレベルを大幅に上回る異例の選曲構成だが、最後を飾るこの作品では完全に体力も集中力も尽きて、歓喜が爆発する第4楽章のカタルシスがなかった。筆者も帰山栄治氏版(そちらの方がよい編曲と思うが…)を演奏した経験があり、第1楽章が大好きだが、もっと速度を落とし、じっくりと泣かせる演奏をしてほしかった。また、ロシア民族楽器オーケストラの音色や演奏を考えれば(『ロシア序曲』もそうだが)Bタイプの音色で演奏した方がよかったのではないか…、いや、これ以上の論評は酷なので止めておこう。

今回の演奏結果は「7打数4本塁打」である。小樽商大の定期演奏会は「8打数7本塁打1安打」で打率43ポイントの差は大きい、アウロラのチャレンジ精神は北海道大学のフロンティア・スピリットの教えを受け継ぐものであり、最後の演奏曲目で己の限界を超えて演奏を続けるひたむきな姿勢が聴衆の心を掴んだのは疑いなく、音量が感動を呼んだのではないのは明らかだ。エンディングに『都ぞ弥生』を演奏したメンバーの表情は本当に晴れやかで、会場から手拍子が湧き上がった。筆者などは手に汗を握って聴いていたのだが、お客様の「学生さん、よくやった」という賞賛を素直に受け止めるべきであろう。

北海道のマンドリン・ギター合奏団の大半(特に社会人団体)は、大正時代からほとんど進歩がない、演奏と呼ぶのはばかられるような自慰的行為を重ねている。一方で、先日の小樽商大や今回のアウロラのような演奏を聴かされれば、「恥を知れ」といいたくなる。

もっとも本州の団体についても、2004年の「アルテ・マンドリニスティカ」、2005年の「ロマンツァ・マンドリーノ・アンサンブル」など時代錯誤でレベルが低い演奏団体の来演が続き、失笑と同情を禁じ得なかったが、関係者は、もっと真摯に楽曲構築に取り組まなければ、マンドリン・ギター合奏という音楽のジャンルそのものが世間様から見放されてしまうという危機感を持つべきである。

今後、来道公演を計画している団体や独奏者は、うかつな演奏を披露すると、学生さんから馬鹿にされることになるので、特に留意されたい(2005.12.11.14:30～、札幌コンサートホール「k i t a r a」大ホール)。